競走馬とわたし

保田隆芳（やすだ たかよし）

私が、この競馬社会に入ったのは、ちょうど中学二年を中退しまして、昭和九年のことでした。現在の尾形厩舎に弟子入りしたのです。

学生時代から乗馬をやっていましたので、一応、競走馬に乗るということで、昔の御料牧場、千葉県の下総にありましたがそこで修業、馬に乗ること、手入れ、いろんな面で半年くらい御料牧場におりまして、初めて競馬場へ帰って来て、本格的競走騎乗技術というものを習うわけなんですが、あのじぶん、私たちの兄弟子として七、八人おりました。もうなんといいますか、入ってからは、丁稚奉公といいますのか、靴みがきや庭はき、いろんなことをやりまして、やっと免許をもらったのが、二年目の十一年の秋に初めてレースに出たんですが、スタートをきって決勝点まで、どこをどう走ったかわからなかったという状態でした。

まあ、誰でもそうでしょう。初めてレースに出るんですから、もうスタートをきって、わずか一分、二分の短い時間ですけれど、5秒か10秒の短い感じだったですね。そんなことが二回くらいありましたけれど、そのうちになれました。それからというのは、乗って今スタートをきって何番目についているとか、追い込んで来たとか意識してレースができるようになったんです。

それでも、はじめて勝つまでには約一年近くはかかりました。それは、昭和十二年のアラブ抽せん馬のレース。二十何頭立てでしたが、それで初めて勝ったんです。初めて勝ったわけですから、それはうれしかったです。

あのときの気持ちは、まあそうですね、鬼の首でも取ったような、という言葉がありますが、あれですね。現在のように、レースを何年もやっておりますと、レースに勝つということは、うれしいんですけれど、そのときのような感激はなくなって来ましたね。

昔は各厩舎、各先生の乗りかたというのがありまして、たとえば、尾形流とか柴田流、何々流といった具合で、朝の攻馬、調教しているとき、その厩舎の弟子の乗り方を見ると、あのあんちゃんはどこの乗り役だということが、だいたい姿勢でわかるくらい厩舎の乗り方、流儀がはっきりしていたのです。

現在、そういうようなことはだんだんなくなって、一つのきまった線の乗り方になっていますから、レースに乗るのをみていても、ちょっとわからないときもあります。

昔はレース、調教でもあの乗り方は誰だと一目瞭然といっていいくらいはっきりわかるような乗り方をしておりましたけれども、中には、特別な天神乗りとか天狗乗りとか、いうような乗り方も大分ありました。私たちの先輩、兄弟子で三年ばかり前に亡くなった伊藤正四郎さんは、のちに調教師をされましたが、その人は、私の兄弟子として、あのじぶんは相当ならした人で、トクマサでダービーを取った人ですが、私も随分その人の技術をまねようと一生懸命やったものです。

あのじぶんの乗り方と技術そのものというものは、乗馬だろうが、競走馬に乗る技術だろうが馬術にはかわりなくて、ただ競走馬に乗る姿勢が違うだけで、一つの姿勢というものを人のまねをして、誰も研究するわけなんです。今はほとんどモンキー乗りといいまして、アメリカに近い姿勢に変わって来ました。

でもあのじぶんもそういうような姿勢で乗っていた人が、二、三人おりましたし、また南米で、四、五年乗って日本に帰り、日本で乗っていた赤石さんという人がおりましたけれど、その人はやはりモンキー乗りのあのじぶんじゃあ、まあ日本では典型的なモンキー乗りといって、みんなもまねしていましたけれど、やはりなかなかあのような騎乗姿勢はできなかったんです。

今は、もうそういう姿勢がほとんどになっておりますから、乗り方において姿勢そのものが、二十年前くらいから見ると非常に変わった。いや二十年というが、実は最近の四、

五年で急にみんなの姿勢、乗り方が変わってきましたですね。

ようするに、私がちょうど五年ぐらい前にハクチカラでアメリカに行ってきまして、そのときに私が向こうでアメリカの騎乗法を研究して帰って来たのですが、それが若い人たちに影響して、みんなの乗り方がアメリカ式に近い乗り方に変わって来ました。だいたい、日本の競馬というものは、元来が英国から入って来たもので、姿勢においても、いろんな管理法においても、英国をまねしたんですけれども、騎乗法がだんだん英国形からアメリカスタイルになって来たというような状態ですから、乗っている姿勢は、昔のようにまちまちでなく、一般にフォームはとてもきれいになって来ましたね。

まあ、私はどっちかといえば、尾形流という長アブミで乗っていたんです。それが、向こうへ行き急に研究したのですが、若いときと違って三十七、八のときですから、向こうへ行ってそのまねをするのは、体がずいぶん窮屈でした。二十代でしたら、それほど苦労しないでやれるんですが、四十近くなってからですから、すごく私はフォームを直す研究をするのに骨がおれました。

今、もう、ほとんどそのような姿勢になって、苦しいということもないんですけど、若い者は、それをまねるにしても、やはり体の柔らかみもあるんでしょう、早く会得してしまいますね。

私が勝った一番最初の大レースといいますと、天皇賞で、戦前はこれを帝室御賞典といいましたが、私たちが乗り初めた頃には、帝室御賞典が現代のように一年に二回、春は関西、秋は関東というんじゃなく、横浜に帝室御賞典があり、あるいは東京に帝室御賞典があり、で、各競馬場にみな帝室御賞典というレースがあったんです。昭和十四年から年二回、春秋一回ずつの帝室御賞典がきまりまして、そのときに、テツモンという馬で優勝したのです。あのときは私が兵隊に行く前ですから、数え二十のときでした。

まあ、そのときは先輩、先生方もそういうレースになってからも取れない人もおり、若い私が取ったというんで、実にうれしいというか、何というか、その感激も、やはり初勝ちしたときと同じような気持ちだったことが今もって忘れられません。

戦前は、私たしか勝利度数が八十何勝、百勝まで行っていなかったんです。大東亜戦争が始まる前、私は兵役で取られていって、五年半のブランクがありました。

私が兵隊から帰って来たのが、終戦のあくる年でしたが、その年の秋から競馬が復活して、レースが再開されました。そのじぶんは、どうも体の具合も本当でなく、四、五年前から兵隊に行ったせいか、乗っていてもぎこちないんですね。だから、一年ぐらい勝てませんでした。やっと勝ち始めたのが、二年ぐらいしてからです。その頃、勝つようになったんですが、その後、天皇賞には馬鹿に私が恵まれて、天皇賞を八回とっているんですね。

ダービーもずうっと戦後毎年かかさず出ておりますが、勝ったのが三十一年のハクチカラ、三十六年のハクショウと二回です。ダービーのようなレースは、相当な昔から先輩、あるいは先生方が日本一の大レースにということで乗っているんですが、なかなかこういうレースは勝てないもので、まあ、一つは運もあると思いますが、そうはいっても、実力がない馬では勝てません。あのレースに臨む気持ちは、私長年乗っているんだから、もう別に何でもないだろうといわれても、ダービーだけは、気持ちが違うんですね。

まるで、一人一人が殺気だって、恐いような感じでしょう。自分ではそういう気持ちじゃないんだが、自然にそうなっちゃうんですね。ダービーだけは、特別なんです。

私などは、この社会に入って自分の教育というか、修業というか、厳しい修業をうけて戦いながら鍛えられて来たという教わり方でした。

終戦後は、そうじゃなく、馬事公苑に騎手養成所がもうけられて、二年間、学科、技術など全部をそこで修業して、二年たったら初めて競馬場にもどって来て、免許を受けるという、相当な技術と学問を、大分、いまやかましくやっているんで、戦前からみると、むずかしいと思います。けれども、誰もさほど手厳しくはいってくれないから、自分で相当研究してやらないと、落ちて行く。のびるには、すぐなんですけど、それだけのびない素質、あるいは、努力のたりない人間は、叩かれていないから、脱落するという差がはげしくなって来ている感じがします。

日本もやっと国際競馬に加入して、毎年外国へも行ける状態になりました。馬もまち論進んでは来たでしょう。昔からみるとスピード的には、時計がつまってきました。十年ぐらい前はいまに比べて二秒くらい遅かったんですけど、今はもうアメリカのレコードに近い時計になって来ているということは確かです。どういうわけで時計がつまったかというと、いろいろ理由はあると思いますが、一概に、馬だけが良くなっているとはいえないのです。ようするにレースの仕方、三歳レースというものが終戦後できたために、スタートを切ってからの乗り方、スピードの出し方というものが変わって来たのも一因でしょう。

そういった関係で、レースのやり方、配分の仕方も自然に変わって来るもので、昔はスタートを切って、追い込み馬と先行馬と二つにわかれた乗りかたであったのです。

今はもう、追い込み馬だといって、後から行ったんじゃ短距離の場合、まに合わないのです。で、結局、スタートを切ってから相当馬にスピードをつけて行かないと、短距離は間に合わない、という乗り方が、一、〇〇〇メートルでも一、六〇〇、一、八〇〇でも同じような状態になって来るのです。

馬もそのような気持ちになって来ているということで、レースの時計の早くなったというのも、そこらに一つの原因があると思います。

昔の人は、馬に乗るのに脚で乗らず、口で乗れという具合に、馬の口むきといいますが、

すごく技術がいり、むずかしいことでもある。馬は非常に敏感な動物ですから、上に乗っかったその人間の技術があるかないかということは、乗るとすぐわかるくらい敏感な気性を持っている。

よくクラが合う。あの馬はどの騎手に合う、合わないということは、その馬の性質とそれに乗る人間の性質とが合わないと、レースにおいても全能力が発揮できないということがいえます。

お手馬、手綱いらずという昔の言葉。ようするに、乗っている人が修業時代は自分一頭の馬を世話しながら、その馬がレースに出る場合がありますから、われわれが乗るより、そういった若い騎手が、自分がいつも手がけているから、その馬に乗ったほうが走る場合があります。

馬は非常に敏感であるし、調教の仕方、食べ物を与える方法とか経験がないと、思うように行かないということもいえます。

われわれのほうも、乗る騎手として、やはりまたがったら、その馬の気性をすぐつかむことが一番大切だ。私なんか多くのレースに調教もしないで、いきなりレースに乗ることもありますし、一応乗るとき、この馬はどういうくせがあるかということを聞いて、またがるのですが、乗った瞬間、この馬はどういうくせがあるんだ、この馬はこういうような気性の馬なんだということを早くキャッチし、またしなければならない。それができないと、レースにおいてもそのまま能力を発揮できないのです。

結局、レースの場合、騎手の勘が必要で、他のスポーツマンと同じことです。特に、わずか短時間において自分の勘でレース展開、作戦を判断しなければなりません。乗る前に、先行馬がここにいるから、何番手につけて行こうと思ったところが、スタートを切った瞬間に、そうでなくなる場合が往々にしてあります。

まあ、ほとんど自分の思うように行くことはないんで、その場合にすぐその場所で自分の作戦を一、二秒の間に変える人間の勘と、馬の敏感さというものが、すぐ伝わって来て、人間のちょっとした誘導のまずさで事故が起きる場合がある。まあ、馬は正直ですから、走るだけ走る競争心があるんですが、そこにおいて、上に乗っている乗り役の勘がくるうと、たまたま事故を起こすのです。

われわれも鎖骨を折ったり、骨折とか、おそらくこの商売をしている者で、無きずな者は一人もいないほどですが、馬も相当な、人間でいうとスポーツマンですから、腰をいためるとか筋肉を痛めるとかいうのが随分でてくるのです。

「満足であること」菊池先生がいわれたように、「無事、これ名馬」というような状態で、満足であるということは、何れチャンスをつかめるというようなことで、なかなか満足に持って行くには、馬自体の健康、丈夫さもありますけど、それを管理して行くのは赤ん坊のめんどうと同じような状態で、いつでも大変なことだと思います。

昔は、一年の競馬の回数が、東京八日間、中山八日間、横浜根岸に競馬場がありまして八日間、春秋二回。競馬の一年間の開催日数は少なかったんですが、現在はもう一年中競馬をやっている状態ですから、馬の使い方もむずかしくなっているし、またそれとは反対に、騎手の勝利度数も戦前とは比較になりません。

私は中央競馬では最多勝の千勝ということなのですが、世界最高はアメリカのロングデンで、五、七〇〇勝近くの勝利をあげています。もっともアメリカの競馬は日本と違って日曜を休み、一週のうち五日か六日競馬をやっているのでレースの数が比較になりません。しかし、さっきもいったように、日本でも戦後は鞍数もふえているので、若い人たちが大いに頑張って、私の記録を越して行ってもらいたいものです。もちろん、私も頑張ります。あと何勝ということではなく、乗れるだけ乗り続けたいと思っています。

（NHK・「趣味の手帳」で放送したもの）

前期重賞競走勝馬一覧表

関東

金杯	二〇〇〇	カネツセーキ（伊藤竹）	
京成杯	一六〇〇	カネノヒカル（加賀）	
AJC	二六〇〇	コレヒサ（森安重）	
京王杯	一八〇〇	スズホープ（野平好）	
東京記念	一八〇〇	グレートヨルカ（保田）	
目黒記念	二五〇〇	アサリユウ（加賀）	
スプリングS	一八〇〇	メイズイ（森安重）	
ダイヤモンドS	三六〇〇	ヤマノオー（古山）	
NHK杯	二〇〇〇	キングダンディー（野平祐）	
東京杯	二四〇〇	アサマフジ（加賀）	
皐月賞	二〇〇〇	メイズイ（森安重）	
アルゼンチンJC	二三〇〇	エムローン（加賀）	
オークス	二四〇〇	アイテイオー（伊藤竹）	
ダービー	二四〇〇	メイズイ（森安重）	
東京障碍特別	三三〇〇	ナスノアラシ（奈良）	
安田記念	一六〇〇	ヤマノオー（森安重）	
中山記念	一六〇〇	ナスノミドリ（加賀）	
日本短波賞	一八〇〇	カネノヒカル（加賀）	
中山大障碍	四一〇〇	ゴールデンオーザ（関口薫）	
日本経済賞	二六〇〇	ヤマノオー（森安弘）	

関西

迎春賞	二〇〇〇	スズカリユウ（松本善）	
日経新春杯	二四〇〇	リユウフオーレル（宮本）	
きさらぎ賞	二二〇〇	アイブルー（武）	
中京記念	二〇〇〇	ハルヒカリ（武）	
大阪杯	一八〇〇	リユウゼット（大石）	
桜花賞	一六〇〇	ミスマサコ（瀬戸口）	
スワンS	一八〇〇	シモフサホマレ（境）	
タマツバキ記念	二〇〇〇	ヒメカツブ（池江）	
天皇賞	三三〇〇	コレヒサ（森安重）	
京都四歳特別	二〇〇〇	チトセリバー（清田）	
京都大障碍	三三〇〇	サチフジ（松本善）	
京都記念	二〇〇〇	モトイチ（須貝）	
阪急杯	一八〇〇	ゴウカイ（栗田）	
鳴尾記念	二四〇〇	リユウフオーレル（宮本）	
毎日杯	二〇〇〇	パスポート（松永）	
宝塚記念	二〇〇〇	リユウフオーレル（宮本）	